

科学技術分野への予算は、将来的にプラスにつながる「投資」になるのではないかと。メディアなどで取

政権交代で公に

税理士 小林 俊範 78
(大阪府吹田市)

民主党政権になってから、自民党政権時代の予算や財政の見直しが行われた。行政刷新会議の「事業仕分け」は目標額こそ下回ったが、高く評価したい。その過程で多くの独立行政法人などの存在を知り、

驚いた。幹部公務員OBらによる「天下り」と「渡り」、高額報酬や退職金についても明らかにした。

これらの機関は、彼らの天下り先などとして設立されたのではないかと疑いたくなる。政権交代がなかったら、こうした事実も公にならなかつたのではないかと。政権交代は絶対に必要なのだ。

議員の定数削減

無職 前川 寛治 81
(大阪府交野市)

長引く不況で仕事がなくなったり、給料やボーナスが下がって月々の住宅ローンを払えなくなったりする人が続出していると聞く。国によって制度が異なり、比較は難しいが、米国の人口は約3億人で、下院

の定数は435、上院は100。一方、日本は人口約1億3000万人で、衆院480、参院242。日本が定数で187も多い。

国民が生活に苦勞している中、税金の無駄遣いは許されない。財政の緊縮化などを図るためにも、議員自らが定数や歳費の削減に乗り出し、少しでも予算の歳出を減らしていくべきだ。

テーマ 考える

国の予算

来年度の予算編成が深刻な財源不足に直面している。税収額と国債発行額の逆転が見込まれ、苦しい台所事情が露呈した形だ。しかし、地方はもっと苦しい。財政がひっ迫し、至るところに疲弊感が漂う。加えて「事業仕分け」は、

〒530・8551 読売新聞大阪本 06・6366・1890 電子メール

時事川柳

前田 咲二 選

このころ遅れてばかりハト時計
剛腕に振り回された宮内庁
マニフェストの改訂版が出来ました
ウツズより頭抱えるスポンサー
年賀状ハローワークの友追加

島根 片山 博文
京都 原田 征男
大阪 楠本 晃朗
香川 中山 喜博
岡山 永田 寿道

OPINION WEST

低炭素社会をめざし、太陽光、風力と並ぶ自然エネルギーとして注目されるバイオマス。サトウキビの搾りかすを原料にしたバイオエタノールの生産から、E3燃料の製造車の走行まで、一貫した技術開発の実証試験が沖繩・宮古島で行われている。このプロジェクトに、大阪北部の彩都で起業したベンチャーが一役買っている。

一面のサトウキビ畑。テストプラントは、製糖工場の隣にある。県内で石油やガスを

販売する「りゅうせき」のプラント推進室が環境省の委託を受け、運営している。

原料は、粗糖を搾り出す作業を3回繰り返し返した残滓の「廃糖蜜」。黒砂糖のように甘い香りが漂うが、どろりとした黒色の液体には強い苦みがある。島の土壌がカリウムなどの塩分を多量に含んでいるからだ。

塩濃度の高さは、アルコール発酵の大敵だ。ブラジルでは、1回搾っただけの塩分の少ない糖蜜を使用している。さびさびまで砂糖を搾り取

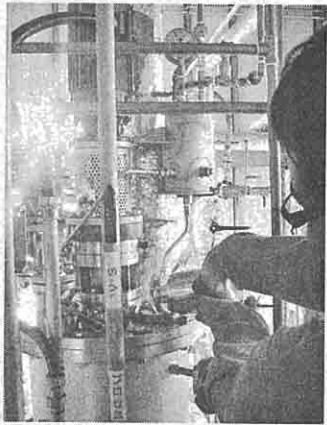
風の座標

バイオ燃料



論説委員 本多 宏

「地産地消」では惜しい



酵母注入作業を再現してもらった。アルコールを燃やしながら発酵槽に入れる

度まで冷やさなければならなかったが、「早苗酵母」は40度でも大丈夫。普通の水で冷やせる。冷却機は不要、つまり電気を節約できる。

もう一つの特徴は、高い凝集性だ。通常、発酵の後には遠心分離器にかけ、アルコールと残滓をより分けるが、この酵母は自然に凝集して沈降するため、上澄みのアルコールをすくい取るだけで済む。これも省エネにつながる。

プラントでは、原料の糖度、生きた酵母の割合、産出直後のアルコール濃度など、最適条件の探索が続く。「早苗酵母」の生命力を最大限に発揮さ

従来の酵母は、反応熱を30

山の神様からの賜りもんだよ」
ただ、米だけは山にはない。だから里の人びとは、山を削って田を作ってきた。



「山の神様のおかげさまで食うてるのに、その神様の縄張りを削って、田圃に変えてきたんだ。だから、お札をせにゃならん」
およそ十年に一度くらいの割合で、この里には、平年の倍くらいの収穫がある年が巡ってくる。その途方もない豊作が、「返し作」の時期となる。

「豊作の翌年は、田圃を一年、休ませるんだよ。休ませて、山の神様に土地をお返しするんだ」
だから「返し作」なのだ。

「けども、さすがに田圃をみんな休ませちゃ、わっしら、一粒の米も食えなくなるからな。どの田を休ませるか、みんなが集まって、籤引きをするんだ」

籤引きは、春に苗を作るとき、合心寺で執り行う。今回もそうだった。そして富一が当たり籤を引いた。
「〈返し作〉にあたった者は、その一年、休ませて田を作っちゃなんねえ。籤にあたった身の回りのものをまとめて、次の年の春まで、あつこの山に籠もるんだ」
猪之介は、寺の北側にあるひとときわ高い山を、大ざっぱに指さしてみせた。